東学　資料政経　巻頭特集扉ページ

①―― 2010 / 巻頭特集

巻頭特集

偽装される世論

―――― マスメディアの現状と課題

新聞、テレビ、ラジオ、雑誌に代表されるマスメディアは、民主主義社会のなかで重要な役割をになっていて、古くからこうした報道機関は、「社会の木鐸」として使命を負うものとされてきた。「木鐸」とは、政治に関する事柄を人々に伝え、ときに警告を発して人々をリードするものという意味だが、そのマスメディアがいま危機的な状況にある。その現状と課題を見てみることにしよう。

①―― 2012 / 巻頭特集

巻頭特集

国債の正体

―――― 国債は、政府が国民から借金をするときの借用証

1年間におよそ170兆円が発行されている日本の国債。その累積残高は660兆円にもなっている。2012年度予算の収入（歳入）の49％を新規発行国債に依存する日本は、ギリシャのように国家財政が破綻するのではないかと危惧する声があるー方で、日本国債は国際的にも安全資産として売れ続けている。この不思議な状況は、いったいどういうことなのだろうか？

▲政府の財政健全化に抗議するデモ（ギリシャ・2011年）

◀国債は、戦争の軍資金を集めるために発行したのが起源だといわれている。写真は支那事変（日中戦争・1937～45年）の戦費調達のために政府が売り出した国債と現在の国債の広告。

①―― 2013 / 巻頭特集

巻頭特集

日本を仕切る官僚たち

―― 国民の多くは気づいていないが・・・

明治以来、日本では官僚たちが日本を主導・支配してきた。第二次世界大戦後の経済成長も、大蔵省（現在の財務省）などの経済官僚を中心に主導され、1970年代後半以降の安定成長期も、その力は絶大なものとされた。しかし、バブル経済が崩壊した90年代に入ると、官僚たちの不祥事が連続して、「公務員制度改革」が必要性が言われるようになる。2009年に登場した民主党政権も、当初は政治家のリーダーシップを強調して、官僚支配の打破を唱えた。果たして、その結果として民意にもとづく政治は実現したのか、中央官庁の機能劣化も指摘される現状とともに検証する。

①―― 2014 / 巻頭特集

巻頭特集

国会議員は誰を代表しているのか？！

―― 国会議員にもっと期待しよう

国会議員が私たちの代表であることに間違いはない。しかし、国民からすると、自分たちと議員たちとの間には深い溝があって、ずいぶん遠い存在のように見えてしまう。その距離をちぢめる努力を怠れば、たちまち国民主権の上に立つ議会制民主主義は成立の根拠を失うことになる。ここでは、議員たちがどういう意味で代表であるのか、その機能はなにか、さらには、どのような待遇をうけ、どんな縛りのなかで仕事をしているのか、国会議員の現状と現実を見てみよう。

①―― 2015 / 巻頭特集

巻頭特集

日本社会の不平等はどこまで進んでいるか？

―― 格差社会の現状をみる

日本社会のこれからを知ろうとするなら、アメリカの現在をみればよい、そんなふうに言われる。そのアメリカで深刻化しているのが経済格差だ。2012年のデータでは、人口のわずか1％の富裕層がアメリカ全体の所得の19.3％を握っている。上位10％の世帯が総所得の50.4％をためるという報告もあり、格差はいよいよ大きな時代にある。その結果、アメリカでは社会的問題が姿を消してきている。日本でよかって「一億総中流」といわれる時代があったが、日本の格差の現状はどうなっているのか、いくつかの観点からみていく。

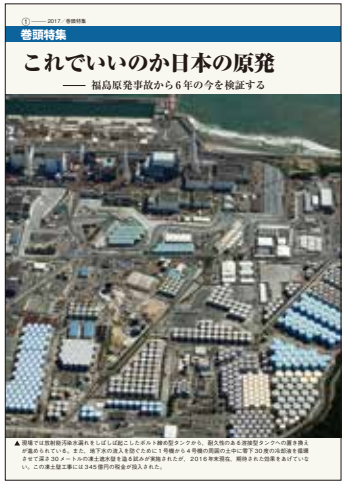
①―― 2016 / 巻頭特集

巻頭特集

他者を受け入れられるか

―― 難民／外国人労働者問題から考える

2020年東京オリンピック誘致の裏、政府からマスメディアまでが「おもてなし」を売りにした。外国人をもてなすことに日本は優れていると言うのだが、本当にそうだろうか。難民の受け入れに異常なほど頑なで、外国人労働者の扱いには冷淡だし、在日外国人へのヘイトスピーチがまかり通る社会が日本だ。しかし、その日本も転換に立っている。少子高齢化で生産労働人口の減少に歯止めがきかない。すでに政府は外国人労働力の導入に舵を切っている。難民／外国人労働者への対応をどうするかは今後の日本が避けて通れない課題だ。



①―― 2017 / 巻頭特集

巻頭特集

これでいいのか日本の原発

―― 福島原発事故から6年の今を検証する

▲現場では放射能汚染水漏れをしばしば起こしたボルト締め型タンクから、耐久性のある溶接型タンクへの置き換えが進められている。また、地下水の流入を防ぐために1号機から4号機の周囲の土中に零下30度の冷却油を循環させて凍土30メートルの遮土壁を造る試みが実施されたが、2016年末現在、期待された効果をあげていない。この凍土壁工事には345億円の税金が投入された。